

主論文の要約

論文題目：

日常会話のコーパスにもとづく「いや」と「不是」の談話機能と韻律的特徴に関する日中語対照研究

(Contrastive Study of Japanese *iya* and Mandarin Chinese *bushi* on Discourse Functions and Prosodic Features Based on Corpora of Everyday Conversation)

氏名：李 嘉

論文内容の要約：

本研究は、『名大会話コーパス』と筆者が収集した14時間の日本語の日常会話の録音データ、7時間の中国語の日常会話の録音データを分析資料として、これまで否定の応答詞、否定の意を表す感動詞、否定の談話標識として扱われてきた日本語の「いや」と中国語の「不是」の談話機能、談話機能と韻律的特徴の関係を明らかにすることを目的とする。「いや」と「不是」には「否定の意」と関連するという共通点の他に、発話連鎖中および発話内の出現可能な位置が複数あるという共通点がある。これらの異なる位置に現れる「いや」と「不是」は、異なる談話機能を果たす可能性がある。したがって、本研究は「いや」と「不是」の機能を異なる位置ごとに分析する。

また、メタ言語否定の概念の導入によって、記述的否定とメタ言語否定の境界線は明確になったが、メタ言語否定の中に含まれているさまざまな言語現象に対して、さらなる詳細な観察と分析を行う必要がある。そこで本研究は、メンタル・スペース理論の「スペース」の概念を導入し、会話場面の情報伝達のプロセスを分析しながら、「いや」と「不是」の意味と機能を考察し、「いや」と「不是」を含む発話は何を否定しているかを明らかにする。

さらに、日本語の「いや」も、中国語の「不是」も、否定の意を表す機能を持つという共通点があるため、「いや」と「不是」の対照研究によって、この2つの表現の意味と談話機能の異同を明らかにすることが可能となる。

本研究の研究目的を達成するために、本研究は以下の研究課題を設定する。

課題 1-1 「いや」の発話内の分布特徴は何か。

課題 1-2 「不是」の発話内の分布特徴は何か。

課題 1-3 「いや」の発話内の分布特徴と「不是」の発話内の分布特徴にはどのような異同があるか。

課題 2-1 発話連鎖において、「いや」で始まる発話が出現する位置とその条件は何か。

課題 2-2 発話連鎖において、「不是」で始まる発話が出現する位置とその条件は何か。

課題 3-1 発話冒頭に現れる「いや」の談話機能は何か。

課題 3-2 発話冒頭に現れる「不是」の談話機能は何か。

課題 4-1 「いや」を談話機能ごとに見ると、それぞれの韻律的特徴は何か。

課題 4-2 「不是」を談話機能ごとに見ると、それぞれの韻律的特徴は何か。

本稿は9章から構成されている。第1章では、本研究の研究背景と研究目的、本稿の構成について説明する。第2章では、本研究の理論的背景、本研究が用いる重要な概念について説明する。さらに、「いや」と「不是」の先行研究について述べる。そして本研究の着眼点を示す。第3章では、本研究の研究課題と研究方法を説明する。とくに、本研究が使用した『名大会話コーパス』と、筆者が構築した『C-ORAL-JPN』と『C-ORAL-CHN』からのデータの抽出方法と分析手順を説明する。第4章では、『名大会話コーパス』における、「いや」の1発話中における分布特徴および、発話連鎖における冒頭に「いや」がある発話の位置、また、前文脈との関係について記述する。結果として、日本語の「いや」は発話冒頭、発話中、発話末尾、独立用法の4つの位置で用いられるという分布特徴、および、発話冒頭の出現率が最も高いことが明らかになった。さらに、発話連鎖という概念を導入することによって、「いや」を含む発話連鎖における分布も明らかになった。発話連鎖内の位置は1つの指標として、「いや」の談話機能を論じる際に有効である。第5章では、発話連鎖内の位置に加え、意味的特徴、発話行為の種類、会話参加者のスペースという4つの指標に基づいて、発話冒頭の「いや」を外示的意味への否定、内示的意味への否定、感情・知識状態の変化の表示、ネガティブな事象への共感という4つの談話機能に分類した。第6章では、第5章で提案した4つの談話機能ごとに、「いや」の韻律的特徴を分析する。その結果、「いや」の持続時間について、「ネガティブな事象への共感」を表す「いや」は他の種類の「いや」と異なり、長く発音される傾向があることが観察された。

第7章と第8章は「いや」と訳すことができる、中国語の「不是」についての考察である。第7章では、『C-ORAL-CHN』における「不是」の発話内の分布特徴と、発話連鎖における「不是」で始まる発話の分布特徴について記述する。さらに、上述の分布特徴の考察と具体例への分析を通して、「不是」が持つ談話機能を記述する。「不是」の発話における出現位置においては、「いや」と同様、発話冒頭の出現率が最も高いが、次は発話中の「不是」、独立用法の「不是」、発話末尾の「不是」の順となり、「いや」の分布と一致する。さらに、「不是」を含む発話連鎖内の位置を観察した結果、連鎖の第1ペア部分と第2ペア部分に「不是」を含む発話が多く見られることが明らかになった。このような発話連鎖内の位置と上述の「いや」を論じた際に用いた指標に基づいて、本研究では、発話冒頭の「不是」を外示的意味への否定、内示的意味への否定、感情・知識状態の変化の表示、その他の修辭的な用法という4つの談話機能に分けた。第8章では、「不是」の談話機能と韻律的特徴について、実証的に分析することで、両者の関係について考察する。その結果、「不是」の各機能の「否定」性の強さによって、異なる韻律的特徴が4点見られた。1点目は、最も「否定」性が強い外示的意味への否定は、焦点を当てる必要があるため、強勢を置いて発音されることが多いことである。2点目は、内示的意味への否定を表す「不是」は外示的意味への否定を表す「不是」より短く発音され、*búshi* もしくは *búsh* に弱化するが、[pu] と [pu] ほどの弱化現象は見られないことである。3点目は、会話の円滑な進行を促進する、修復、話題転換のために用いる感情・知識状態の変化を表示する「不是」は、「否定」性が弱いため、母音の弱化や持続時間の短縮が起きることである。4点目は、「不」と「是」の組み合わせとして用いられる修辭的な「不是」が置かれる反語文は、相手の同意を促す行為を実行するために用いる会話のストラテジーであり、感情・知識状態の変化を表示する「不是」と同様、持続時間の短縮および母音の弱化のような顕著な韻律的な変化が生じることがあることである。

「いや」と「不是」の談話機能は以下の表1のようにまとめられる。

表1. 「いや」と「不是」の談話機能と特徴の総覧

<div style="text-align: right;">基準</div> <div style="text-align: left;">機能の分類</div>	意味的特徴	連鎖中の位置	発語行為の種類	会話参加者のスペース
外示的意味への否定 (type1)	<p>先行発話の命題に対する否定。 「いいえ」に相当する。 逆接を表す接続詞「でも」、動詞「違う」のような否定的意味が含まれる語と共起する。 中国語の場合、「不对」に置き換えることができる。</p>	連鎖の第 2 ペア部分	<ul style="list-style-type: none"> ・不同意 ・拒絶 ・謙遜を表す ・謝罪や感謝を表す言葉に対しての否定の意を表す ・質問への否定回答 否定応答という独立的な発語行為として考えられる。 	話し手と聞き手の共有スペースで会話参加者の間で衝突を起こす。命題の意味に相違が見られる。
内示的意味への否定 (type2)	<p>先行発話の含意と前提への否定。 「いいえ」に置き換えることができない。 逆接の接続詞「でも」との共起が見られる。 中国語の場合、「不对」に置き換えることができない。</p>	連鎖の第 2 ペア部分	<ul style="list-style-type: none"> ・質問への抵抗 ・前提への否定 ・発語内行為への抵抗 独立した発語行為ではない。前後文脈の逆接関係を示すことができる談話標識の一種である。 	衝突は明示的なものではない。意味的否定のような命題の否定が見られない。発話に含意されるものによって衝突が起こされている。
感情・知識状態の変化の表示 (type3)	<p>話し相手の発話に否定の意を表すのではない。 否定的意味が含まれる語との共起がなく、「なんか」などの感動詞と連続的に産出されることがある。 中国語の場合、</p>	連鎖の第 1 ペア部分 連鎖の第 2 ペア部分	<ul style="list-style-type: none"> ・話題転換 ・言い直し ・経験を述べる前置き 感動と感情を表す時に用いられる。他の発話に伴わない、単独の場合には発語行為が成り立たない談話標識である。 	会話参加者が共有スペースから新しい情報や感情の刺激を受けて、そこから新たな発話内容あるいは話題を展開させるプロセス。

	「啊」「欸」「嗯」などのような気付きを表す感動詞と共起することがある。		る。	
ネガティブな事象への共感 (type4) 「いや」のみ	ネガティブな見解を持っているため、「大変」、「～すぎる」のようなマイナスイメージを表す形容詞、程度副詞と共起する。 「そう」、「そうですね」のような同意・賛成を表す表現と共起する。	連鎖の第 2 ペア部分 連鎖の第 3 要素	<ul style="list-style-type: none"> ・発語内行為への支持と賛成 ・話題へのネガティブな共感を示す ・話題へのネガティブな評価 談話標識の一種である。	話題に対して、会話参加者がネガティブな感覚・評価を共有する形で、共有スペースにネガティブなニュアンスを含む発話が産出される。
その他の修辭的用法(type5) 「不是」のみ	否定・肯定に関係なく、会話中の問題を解消させるための修辭的な意味を持つ。	連鎖の第 1 ペア部分 統語構造に強い依存性を持っている。	反語文などのような文の構成要素として用いられる。 会話中のトラブルを修復し始めようとする時に用いる遡及的な言語表現である。 同意を求める。 共通認識、共通感覚を確認する。	話題に対して、会話参加者が認識、感覚、評価を共有する形で、共有スペースに産出される。

第9章は終章であり、本研究をまとめ、研究課題の答えを示す。そして日本語の「いや」と中国語の「不是」の対照を行い、本研究の意義と今後の課題について述べる。本研究の結果、異なる談話機能を持つ「不是」の間に、脱範疇化、意味の漂白、主観化、使用頻度、発音の短縮と弱化の度合いに差が見られた。

低—————→ 高
 外示的意味への否定 > 内示的意味への否定 >

感情・知識状態の変化の表示 > その他の修辭的用法

反対に、「いや」に対しては、このような明らかな傾向が見られなかった。日本語の話し言葉における「いや」の意味は、「いいえ」という否定応答、「嫌な」という形容詞（形容動詞）、古典日本語に存在していた驚嘆を表す感動詞（『日本国語大辞典』第1巻:1359-1360）、という具合にそれぞれ異なる由来が存在する可能性があるからである。したがって、談話標識の文法化もしくは語彙化のプロセスを論じる際には、安易に1つの言語表現として考えることは適切ではないことが明らかになった。

本研究は、「いや」と「不是」を研究対象とし、その異同について、考察を行った。本研究が行ったように、複数の基準をもとに分類することによって、これまでの談話標識、応答詞、感動詞などを巡る議論や、品詞が異なる語の談話機能を比較することも可能となる。このことからさらに、統語構造が異なる言語間における対照研究に有益な示唆をもたらすことが期待できる。このような対照研究を通して、個別の言語表現の談話機能のみならず、談話機能と言語表現に由来する本来的な意味と統語的な役割の間にどのような関係があるのか、また談話機能が相互に持つ関係性とはなにか、についてもより明らかになると考えられる。